

令和6年度 私立学校専門研修会・教育課程部会 実施報告

研究のねらい

「深い学び」を追求する ～個別最適で協働的な授業づくりと思考力の究め方～

世界が多様化し激しく変化する社会の中で、様々な課題を解決するための人材育成が求められている。そこで、生徒たちが創造性を培い、主体的に学び続けられるように、先を見据えた「深い学び」を絶えず追求・発展させることは私学の使命である。その実現には最新の教育情報を取り入れた授業づくり等教員の自己研鑽は欠かせない。

今年度の当部会では、「個別最適で協働的な学びを取り入れた授業のつくり方」と「創造的思考力の育み方」について、講演・ワークショップで自ら実践して深く学び、学校視察や研究討議等のプログラムを通して、それぞれの課題や目標に向き合い、成長する場としたい。

会 期 令和6年6月27日（木）・28日（金）

会 場 [京都リサーチパーク](#)（京都市下京区中堂寺栗田町93他）
[立命館宇治中学高等学校](#)（宇治市広野町八軒屋谷33-1）

参 加 者 数 132名

参 加 対 象 理事長・校長・副校長・教頭・教務主任及び教員

基 本 日 程

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
	30	50	30		30	15	45		45	30
6月27日 （木）		受付	開 会 式	講演Ⅰ ワークショップ	休憩 昼食	講演Ⅱ ワークショップ	休憩・ 移動	研究討議	休憩・ 移動	教育懇談会
6月28日 （金）		受付	開 会	授業視察 施設見学	学校説明 実践報告	全体会 （質疑応答等）				

研 修 内 容

■ 講演Ⅰ・ワークショップ

演 題 「深い学び」のデザイナー対話型論証を通してー

講 師 松下 佳代 京都大学大学院教育学研究科教授

■ 講演Ⅱ・ワークショップ

演 題 探究的な学びと授業文化のアップデート

講 師 西村 圭一 東京学芸大学大学院教育学研究科教授

藤村 祐子 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構准教授

■ 研究討議 「深い学び」の追求

■ 教育懇談会

■ 学校視察 立命館宇治中学高等学校

- ◇ 視察校代表挨拶 越智 規子 立命館宇治中学高等学校校長
- ◇ 学 校 説 明 西原 丈人 立命館宇治中学高等学校高校教頭
- ◇ 実 践 報 告 酒井 淳平 立命館宇治中学高等学校キャリア教育部長
- ◇ 授業視察／施設見学／全体会（質疑応答）

学 校 紹 介

[立命館宇治中学校・高等学校](#)（理事長 森島 朋三／校長 越智 規子）

立命館宇治中学高等学校は、1965年に「学校法人宇治学園」が設置、「宇治高等学校」を創立された。1994年に学校法人立命館と学校法人宇治学園の法人合併により「宇治高等学校」を「立命館宇治高等学校」に改称された。翌1995年に立命館宇治高等学校に1期生が入学、2003年に立命館宇治中学校が開校された。2009年に国際バカロレア機構(IBO)により関西の一条校初のIBディプロマ・プログラム(DP)校として認定され、世界基準の探究学習を实践する高校IBコースと中学IPコースを開設し、ハーバード大学をはじめとする海外名門大学への進学者を輩出している。また、1年間の留学とイマージョン授業でグローバルリーダーを育成する高校IMコース、3年間の探究を柱に文理融合の学びを究める高校IGコース、多様な学びと経験を通して確かな基礎力と探究力を育む中学ICコースを展開している。

立命館の建学の精神「自由と清新」と、教学理念「平和と民主主義」に基づき、卓越した言語能力に基づく知性と探究心、バランスのとれた豊かな個性、正義と倫理に貫かれた寛容の精神を身につけた未来のグローバルリーダーを育成し、世界と日本の平和的発展に貢献することを教育目標とし、国際バカロレア機構が提唱する「Learner Profile（学習者像）」をふまえた「理想とする人間像」を明確に定め、その育成をめざし教育を展開している。課外活動においても、高校の硬式野球部、柔道部、陸上競技部、アメリカンフットボール部、チアリーダー部、ラクロス部、バトントワリング部、中学のアメリカンフットボール部、テニス部、バトントワリング部など、全国レベルの大会で活躍。その実践を探究の学びに繋げる文武の往還により、さらなる高みを目指している。

講師・指導員（順不同）

松下 佳代	京都大学大学院教育学研究科教授
西村 圭一	東京学芸大学大学院教育学研究科教授
藤村 祐子	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構准教授
越智 規子	立命館宇治中学高等学校校長
八木 誠	立命館宇治中学高等学校副校長
西原 丈人	立命館宇治中学高等学校高校教頭
酒井 淳平	立命館宇治中学高等学校キャリア教育部長
吉田 晋	富士見丘中学高等学校理事長・校長
平方 邦行	一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長
広石 英記	東京電機大学副学長

専門委員・指導員（順不同）

森 涼	学校法人石川高等学校・石川義塾中学校理事長・校長
大羽 聡	千葉英和高等学校理事長・校長
松谷 茂	学校法人文化杉並学園理事長
鈴木 弘	香蘭女学校中等科・高等科校長
齋藤 真人	立花高等学校校長
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長

研修会日程・プログラム

【初 日】6月27日（木）

〈受付・全体会会場〉京都リサーチパーク 4号館地下1階バズホール

10:00～10:30	◇受 付◇
10:30～11:00	◇開会式◇ 司会 川本 芳久 一般財団法人日本私学教育研究所理事・事務局長 1. 開会 2. 主催者代表挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長 3. 役員・専門委員紹介 4. 研修会運営方針説明 森 涼 教育課程専門委員長 5. 日程説明 6. 閉式
11:00～12:30	◇講演Ⅰ・ワークショップ◇ 司会 松谷 茂 教育課程専門委員 講師紹介・謝辞 広石 英記 東京電機大学副学長 演 題 「深い学び」のデザイン—対話型論証を通して— 講 師 松下 佳代 京都大学大学院教育学研究科教授
12:30～13:15	◇昼 食◇ 会場：全体会会場
13:15～14:45	◇講演Ⅱ・ワークショップ◇ 司会・講師紹介・謝辞 鈴木 弘 教育課程専門委員 演 題 探究的な学びと授業文化のアップデート 講 師 西村 圭一 東京学芸大学大学院教育学研究科教授 講 師 藤村 祐子 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構准教授
14:45～15:00	◇休憩・移動◇
15:00～16:45	◇研究討議◇ 会場：4号館及び1号館に分かれて実施 テーマ 「深い学び」の追求 小グループで参加各校の現状や課題等について意見交換を行います（司会は参加者が務めます）。 グループ① 指導助言：大羽 聡 会場：バンケットホール A(4号館地下1階) グループ② 指導助言：森 涼 会場：バンケットホール B(4号館地下1階) グループ③ 指導助言：広石 英記 会場：ルーム 1(4号館2階) グループ④ 指導助言：齋藤 真人 会場：A会議室(1号館4階) グループ⑤ 指導助言：鈴木 弘 会場：B会議室(1号館4階) グループ⑥ 指導助言：松谷 茂 会場：C会議室(1号館4階)
16:45～17:00	◇休憩・移動◇
17:00～18:30	◇教育懇談会◇ 会場：1号館1階「アトリウム」 司会・進行 齋藤 真人 教育課程専門委員
18:30	◇解 散◇

【2日目】6月28日（金）

〈会場〉立命館宇治中学高等学校

9:00～9:30	◇受 付◇ <受付>B棟入口
9:30～12:30	◇学校視察◇ <全体会会場>B棟大ホール 司会 八木 誠 立命館宇治中学高等学校副校長 (9:30～9:40) ○校 長 挨 拶 越智 規子 立命館宇治中学高等学校校長 (9:50～10:40) ○授業視察・施設見学 中学1年生から高校3年生までの第2校時の授業を視察します。 (11:00～12:00) ○学校説明・実践報告 西原 丈人 高校教頭／酒井 淳平 キャリア教育部長 (12:00～12:30) ○全体会（質疑応答） 立命館宇治中学高等学校担当者 ○お礼のことば 大羽 聡 教育課程専門委員
12:45	◇解 散◇

●概要●

令和6年6月27日(木)～28日(金)の2日間、「『深い学び』を追求する～個別最適で協働的な授業づくりと思考力の究め方～」を研究のねらいとして、初日は京都リサーチパーク(京都府京都市)、2日目は立命館宇治中学高等学校(京都府宇治市)で開催し、定員を超える132名が参加した。

初日は、午前は松下佳代・京都大学大学院教育学研究科教授による講演Ⅰ・ワークショップ「『深い学び』のデザイナー対話型論証を通して」、午後からは西村圭一・東京学芸大学大学院教育学研究科教授、藤村祐子・東京学芸大学先端教育人材育成推進機構准教授による講演Ⅱ・ワークショップ「探究的な学びと授業文化のアップデート」が行われた。その後、「『深い学び』の追求」をテーマに、①探究活動についての取り組み及び課題、②個別最適な学びのデザイン、③学校での深い学びを育むための実践及び課題を主なキーワードに、6つのグループで更に4人ずつの小グループに分かれて、研究討議を行った。また、夕刻からは参加者同士の交流を深めることを目的とした教育懇談会を立食形式で行った。

2日目は9時30分から立命館宇治中学高等学校にて、学校視察を行った。学校視察は越智規子・同校校長からの挨拶の後、中学校22クラス、高等学校38クラス及びIBコースの2限目の授業を視察した。続いて西原丈人・同校高校教頭の学校紹介、酒井淳平・同校キャリア教育部長の実践報告をうけ、最後に視察校の先生方と参加者による質疑応答が行われた。

●開会式●

◆主催者挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長

全国から132名の先生方にお集まりいただき、「『深い学び』の追求」を目的に教育課程部会を開催することができたことに感謝申し上げたい。

今の日本の教育の現況を憂い、変えていかなければならない。本研修会のテーマや学校視察に興味を持って頂いているだけでなく、それ以上に先生方が危機感を持っていると思う。ここ数年で、日本の教育が大きく変わった。特に、ICT教育の推進はめまぐるしく、その原点はコロナによるパンデミックだと思う。当初、文部科学省の結論は、使用教科が限られることなどから、生徒3人に1台の端末を配布する想定で、単なる道具扱いだった。一方で私立学校では、生徒一人一台が主流で、探究型学習もすでに取り組んでいた。

新しい学力も必要だと思うが、対面教育の大切さ、ルールを守ることや、挨拶、掃除当番などの日本の教育における人と人とのふれあいの中で生まれる尊敬の念は、諸外国からも評価が高い。多様性という言葉が目立つが、その言葉の裏には、自分のやりたいことだけが正しいことだという感覚がはびこっているように感じる。本来の中等教育で行われる教育は、社会性を身につけさせ、その中で対話をしながら人材を育てていくことでその原点が深い学びではないだろうか。

我々の使命は、世界に通用する日本人を育成していくことだ。自分自身の考えをしっかりと他者に伝えられるような基礎作りは、深い学びを行うことにつながっている。今回の学校視察を含め、研修会全体のプログラムを通して、各先生方にとって価値のある研修会となることを願っている。



◆研修会運営方針説明 森 涼 教育課程専門委員長

まず、本研修会へ参加頂いた先生方の期待度は高く、募集定員が120名のところ132名の参加を得たことに感謝申し上げたい。北海道から鹿児島まで全国津々浦々からお集まり頂いた先生方には御礼を申し上げたいと思う。

新しい学習指導要領が実施され、3年が過ぎ、ようやく学校でも新しい指導要領のもと教育課程が運営されている。知識技能の習得にとどまらず、主体的・対話的で深い学びを通して、子供たちに創造的思考力、判断力や表現力を養い、他方でICTを活用した探究型授業がカリキュラムの軸に据えられている。しかし、ICTの普及率には学校間の格差がうかがえる。ICTの活用方法も温度差を感じ、これらが喫緊の課題だと感じている。文部科学省では次期学習指導要領の検討に入っている。令和の日本型学校教育で提言された個別最適な学び、協働的な学びが2本の柱になるだろう。そのような教育の動向を念頭に置いて本研修会を実施している。深い学びを追求するというねらいのもと、講演、研究討議や学校視察を通して、共に深く学びを追求していく実りのある研修会にしていきたい。



●講演Ⅰ・ワークショップ● 「深い学び」のデザイン—対話型論証を通して—

講師 松下 佳代 京都大学大学院教育学研究科教授

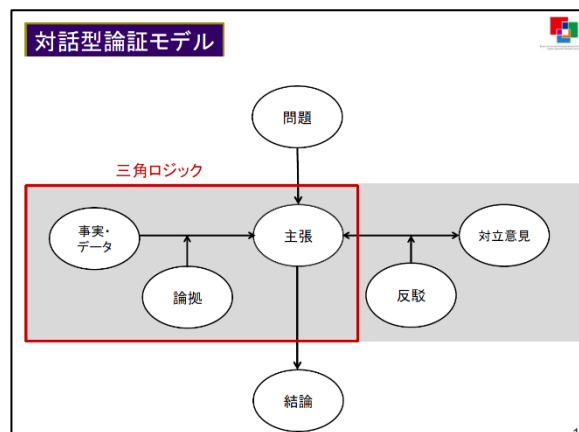


本日は「深い学び」をテーマに、対話型論証を軸としながら、できるだけ具体的な話をしていきたいと思います。

「深い学び」は、「主体的・対話的で深い学び」というフレーズで語られています。なぜ「主体的」「対話的」「深い」という3つが取り上げられているのでしょうか。佐藤学氏の「学びの三位一体論」（1995）では、「学びとは、学習者と対象世界との関係、学習者と他者との関係、学習者と自己との関係」という3つの関係を編み直すことと定義されています。3つの関係の編み直しを同時に行っていくことが「学び」なのだということです。これを念頭に置けば、「深い学び」は「対象世界との関係」、「対話的な学び」は「他者との関係」、「主体的な学び」は「自己との関係」に対応するということができます。つまり、学びを、3つの軸にそってより豊かなものにする方向性を示したのが、「主体的・対話的で深い学び」ということなのです。では、どうすればこのような学び、なかでも「深い学び」を実現させていくことができるのでしょうか。

私は「対話型論証」という活動を提案したいと思います。予測困難な時代のなかで、学校や教師に求められることは増え続けています。それは初等中等教育に限らず、高等教育でも同じです。そこで、私は、本当に学校でなければ身につけられないことは何かを、あえて一つに絞ってみました。それが「対話型論証」です。対話型論証とは「ある問題に対して、他者と対話をしながら、根拠をもって主張を組み立て、結論を導く活動」のことです。この活動は、深い学びを行う上でも中核的な働きをします。今回の学習指導要領の改訂のポイントとして、小・中学校では、「社会について資料に基づき考える」「観察・実験を通じて科学的に根拠をもって思考する」「意見と根拠、具体と抽象を押さえて考える」「実験レポートの作成、立場や根拠を明確にして議論する」、高等学校では、「社会的事象について資料に基づき考察する」「主張と論拠の関係や推論の仕方など、情報を的確に理解し効果的に表現する」などが挙げられています。実際、全国学力・学習状況調査でもこのような項目が中心になって問題が作られています。これらは実は、いずれも対話型論証の一部なのです。

私はこの対話型論証をモデルに表現してみました。それが「対話型論証モデル」です（右図）。「問題」とは「ある対象や状況についての問題意識やその背景、またそこから設定した問題」で、習得や活用の段階では教師側から提示することが多いですが、探究の段階に進むと、生徒が自ら問題を設定することが求められます。このモデルでは、問いと答えの間には距離があります。問題に対して「結論」を導くわけですが、その過程はいくつかの「主張」から成り立っていて、それらを組み合わせて結論が導かれることになります。主張は、何らかの「事実・データ」を根拠としています。その際に両者を結びつけるのが「論拠」（概念・法則・原理、公式など）です。「事実・データ」「論拠」「主張」、これら3つの要素は「三角ロジック」と呼ばれています。一方、多くの場合、ある問題に対して、自分とは異なる主張、あるいは対立する意見を持っている人がいます。その「対立意見」に対して「反駁」を加えることで自身の「主張」を正当化することができます。このように対話型論証を一つのモデルで示すことで、教師だけでなく生徒も理解しやすくなります。現在、生徒の資質・能力の育成が重視されていますが、三角ロジックは論理的思考力や批判的思考力を、「主張」「対立意見」「反駁」ではコミュニケーションを通じた対話力を養い、縦の「問題」「主張」「結論」の3要素は問題解決力の軸となっています。



学校では生徒に調べ学習をさせる機会があると思いますが、いろいろ調べたことが書かれてはいるものの、問題—主張—結論の軸がしっかりできていないことが往々にしてあります。大学生にも共通していえることですが、教師が生徒に対して、「問題」は何かを絶えず問う必要があります。対話型論証は直

線的に進むのではなく、行ったり来たりしながら進んでいきます。それは生徒の探究活動でも、科学者の研究でも同じです。

この対話型論証モデルでは、三角ロジックがカギになっています。三角ロジックは難しいと思われがちですが、実は公立小学校でも取り組みの事例があります。また、中学1年の国語の教科書にも載っています。『現代の国語1』（三省堂）の説明文「玄関扉」では、「日本の玄関のドアはたいがい外に開くのに対し、欧米では例外なくとっていいほど内側に開くのである」という一つの「事実」から、その理由づけ（論拠）の違いによって、「欧米は、外来者を客として受け入れる文化だ」と「欧米は、外来者を敵として拒む文化だ」という正反対の「主張」が導かれるということが示されています。そして、「主張」と「事実」と「理由づけ」の3つを区別し、この三点を意識して考える方法が「三角ロジック」であり、主張の正しさを確かめるためには、事実と理由づけが正しいか、理由づけが事実と主張とを論理的に結びつけているかが重要だ、と書かれています。先生方は、授業の中で生徒が述べた意見に対して、「どうしてそう思うの？」と根拠を聞くことがありますよね。その「根拠」は、実は「事実」と「理由づけ」の二つから成り立っているのです。

今は国語の例でお話ししましたが、三角ロジックは、様々な教科で使われていて、その使い方には各教科の特質が反映されています。右の表はそれを整理したものです。

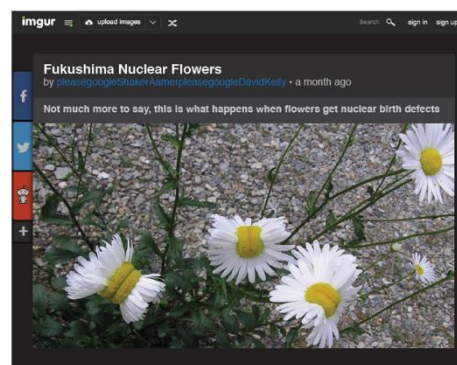
	事実・データ(data)	論拠(warrant)	主張(claim)
	根拠、証拠(evidence)	理由、理由づけ(reasoning)	解釈(読み)、主張
国語科	テキストの記述	これまでの経験や既知の知識など(作品に関する知識や文学・言語に関する概念を含む)	作品の解釈(多様な解釈が許される)
英語科	リーディング、ライティング、ディベートなどで、文章や議論の中の三角ロジックを把握したり、それを使って文章や議論を組み立てる		
社会科(歴史)	史資料(文献、図像など)から得られるデータ	歴史的な文脈についての背景知識など	史料の解釈(より妥当性の高い解釈が追求される)
理科	観察・実験によって得られるデータ	科学的な概念や原理・法則など	主張(真理性が追求される)
数学科	個別の事例や値・式など	公理や定理、公式、数や図形の性質など	証明すべき命題や求めるべき解(数学的確定性が追求される)

大阪府の私立高槻中学校・高等学校の例を示したいと思います。私は数年前から、教員研修や授業づくりなどに関わってきました。高槻では、先ほどお示したモデルからさまざまなバリエーションが生まれました。特に総合的な探究の時間で用いているのが、対立意見も三角ロジックで表現する仕様のものです。対立意見（対立する主張・異なる主張）にも、自分の主張と同じように、やはりそれなりのロジック（事実・データや論拠・理由づけ）があるわけで、それをちゃんと表現していこうというものです。時には議論しているうちに、相手の意見の方が説得力があると思うようになることもあります。そのときは意見を変えてもよいと言っています。図としては複雑になりますが、生徒にとってはこちらの方がわかりやすいようです。

このような話をすると、対話型論証をディベートと混同されることがあります。しかし両者は同じではありません。ディベートは肯定・否定の立場を役割として与えられた上で議論をし、勝敗をつけますが、対話型論証は、自分がどのように考えるのかを選び、対話を通して相手から学んだことを踏まえて最終的な結論を導き出します。結論で終わりではなく、そこからまた次のサイクルにつなげていくこともできます。

ここから授業の例をいくつかご紹介しましょう。中2社会の「中国・四国地方」の授業では、「小豆島に橋をかけるべきだろうか」という問いについて、「橋をかけるべきである・ない」で自分の意見をまとめて班（4人グループ）で議論しました。ある生徒は、最初は便利になるという理由で「かけるべきである」と考えていましたが、班で議論するなかで、島の責任者の「今でもそれほど不便ではない、橋をかけると経済的負担が大きくなる」という声に耳を傾け、「かけるべきでない」に意見を変えました。そしてそのプロセスを振り返りにまとめています。また、中3国語の「俳句の世界」の授業では、「咳をしても一人」という俳句について、「圧倒的な孤独感」を感じさせる一番の要素は？という問いに対し、「俳句の中の言葉」と「表現技法」という2つの意見が出てきました。この両方をふまえて、自分の意見をまとめています。

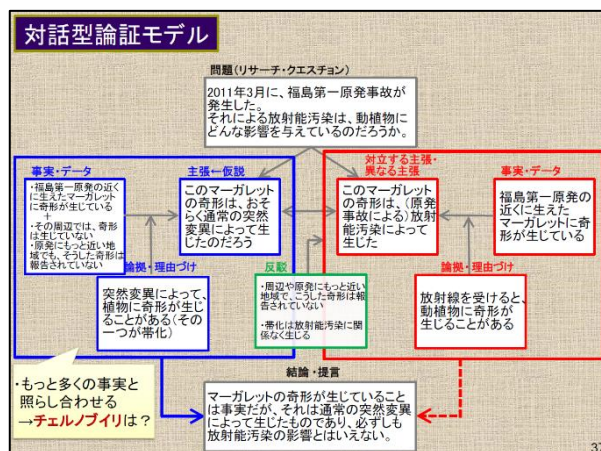
では、みなさんにも対話型論証モデルを少し体験していただきましょう。高槻高校1年の「総合的な探究の時間」でも使っている教材です。「2011年3月11日に、福島第一原発で大規模な原子力事故が発生しました。右の写真は、2015年7月に画像共有サイト Imgur に投稿されたものです。この投稿は福島第一原発近くの状況を示す強い証拠となるものでしょうか。強い証拠になるかならないか（その理由）、あなたの推論を説明してください。」



これは、スタンフォード大学の研究グループが高校生 170 名を対象に行った調査です。写真があることが強い証拠だ、といった理由づけで「強い証拠になる」が約 4 割、加工された写真かもしれない、植物の突然変異によるのかもしれない、などの理由づけで「強い証拠にならない」が約 2 割でした。

この写真について私も調べてみたのですが、もともとは、2015 年に那須塩原市（福島第一原発から 150km の場所）で撮影された写真であること、投稿者≠撮影者で、Imgur 投稿者は元の撮影者の SNS の文章を置き換えて別の意味づけをしたのだということがわかりました。また、このような奇形は帯化と呼ばれていて放射能と関係なく生じる現象だということもわかりました。

この一連の流れを説明した上で、「2011 年 3 月に、福島第一原発事故が発生したことによる放射能汚染は、動植物にどんな影響を与えているのだろうか」を問題として作った対話型論証モデルが右図です。Imgur 投稿者の主張を右側に置いてそれを反駁するモデルになっています。



生徒自身の立てた問いによる探究の実践例についてもご紹介しましょう。高槻中学校・高等学校では中学 3 年から高校 2 年にかけての総合的な探究の時間で、対話型論証モデルを使っています。その際には、対話型論証を用いながらどう探究を進めていくのかを、「探究チャート」で示しています。一応の順番は、問題→自分の主張の三角ロジック→対立する主張の三角ロジック→反駁→結論・提言としていますが、実際には、2 つの三角ロジックは同時並行的にできあがっていきます。また、調べながら何度も問いを立て直す、行ったり来たりするサイクルが大切です。深く考えるなかで、自分と似たような考え方や、対立する主張を学び、最終的な結論を導き出すよう指導しています。それぞれの生徒の作った対話型論証モデルを OneDrive で共有することで、生徒がどこまで進んだのか、どこで行きづまっているのかがわかり、個別対応することもできます。最後には、対話型論証モデルを使ったポスター発表を行います。対話型論証で共通言語ができていたので、ポスター発表での生徒同士の議論も活発です。生徒からは「発表してみると、根拠が自分の主張になってしまっていると気づき、データと根拠をもっと真剣に考えた方がよかったと思いました」「質疑応答で、自分でも気づけなかったところを指摘され、根拠が弱いところの改修ができたり、自分自身の考えをさらに高めることができたように思いました」などの振り返りがありました。発表を通してテーマへの理解をさらに深めることができ、また、生徒同士の対話をサポートする共通のツールとしても機能していることがうかがえます。

最後に大学入試との関係についてもふれておきたいと思います。対話型論証で培われる力は、大学入試でも問われている力です。例えば、名古屋大学の 2020 年度の日本史入試では、豊臣秀吉にまつわる複数の資料を示して、「どのような事実誤認や誇張がなされているか、いずれも史料に即して、論述せよ」という問題が出題されました。これは、受験問題集では難問として取り上げられていますが、誰が、どういう目的で書いたものかに注意しながら対話型論証モデルを使うと、かなりわかりやすくなります。もう一つの例は、2022 年度大学入学共通テストの物理基礎の問題です。王女と細工師の間でスプーンが純金製かどうかめぐって、実験と議論が行われていきます。問題の場面設定にはやや無理があるように感じますが、科学的に探究する過程を重視している問題です。これも対話型論証を使うとロジックが追跡しやすくなります。

最後にまとめです。本日みてきたように、対話型論証モデルは「習得・活用・探究のそれぞれの段階」「さまざまな教科・領域・分野」「さまざまな学校段階（小・中・高・大）と学校後（社会）」をつなぐツールです。これは、そもそも資質・能力自体がつながっているからです。対話型論証を、深い学びを促すとともに、資質・能力を育成するツールとして使っていただければと思っています。

●講演Ⅱ・ワークショップ● 探究的な学びと授業文化のアップデート

講師 西村 圭一 東京学芸大学大学院教育学研究科教授

講師 藤村 祐子 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構准教授

我々は三菱みらい育成財団の助成を受けて高校探究プロジェクトを続けて4年目となる。探究をキーワードに、全国の高校生によりよい学びを届けるために高校の授業をアップデートしたいという想いのもと、「点を線に、線を面に」をスローガンに活動を展開している。同じような想いを抱いている先生方が、それぞれの学校でその想いを発揮できるような環境を整えるには校内研修が欠かせない。本日は校内研修をどのように行えば良いのか、3つのキーワード「め線合わせ」「意識合わせ」「呼吸合わせ」をもとに考えていきたい。



午前中の対話型論証の講義を踏まえて、改めて「対話」について考えながら進めたい。東京学芸大学と日本 OECD 共同研究プロジェクト「壁のないあそび場」との共催ワークショップにおいて参加生徒や学生が設定した対話のルールが8個（「沈黙を歓迎する」「否定も断定もしない」「お互いの顔色伺いをしない！」「心の変容を許す。考えが変わることもある」「耳を澄ませて聴く」「立場や年齢に拘らない」「わからないと言える雰囲気づくり、わかったふりをしない」「対話を楽しむ！違いを楽しむ！」）ある。これらをもとに、対話を深めてほしい。

アイスブレイク『自己紹介』『こんな授業はいやだ（自分の担当教科以外で）』⇒グループでシェア

アイスブレイクで少しめ線合わせができたと思う。校内研修では教科別のグループで行ってもいい。先生方の様子を見ると、一方的な授業という声が多い。情報量が多いが、何も残らないという授業ということだろう。生徒にとっての「深い学び」とは、教員にとっては「残したい学び」ということになる。それでは「残したい学び」は何かを考えていきたい。

例えば、算数で分数の計算問題を出題したときに、すぐに計算方法を教授せず、まずは、今まで学んだことを全て使って児童一人一人に考えてみようとして投げかける。残る学び、残したい学びはどのようなことかを念頭に置き、計算結果だけではなくて計算方法を見出す過程を重視する。次の単元につながるような、子どもの中に残るような指導を心がける。図形の面積の公式をとっても、公式を覚えるのではなく、公式の作り方を学ぶことが大切だ。同じ授業内容でも学びの深さが変わってくる。

歴史の授業では、「ルネッサンスとは何か」を一方的に説明する前に、「コミュニケーション技術の進歩は、何をもたらすのか」などと問いを投げかけ、それを念頭におき学習を進められるようにする。さらに、単元の終末には、「今の時代のコミュニケーション技術の進歩は何をもたらしているか」と問う。そうすることで、生徒にとって残る学び、深い学びを創り出せる。

換言すると「転移可能な見方・考え方」となる。捉え方を誤ると、教科学習を抜きに、論理的思考力や汎用的な見方・考え方のみを教えれば良いという方向に進んでしまう。しかし、それでは教科の学びが深くなっていかない。それらには文脈依存性や教科依存性があるので、言わばボトムアップ的に積み上げていくことで汎用化されていく。はじめから汎用的なものとして学ばせようとする、かえって、どこでも発揮できないということに陥ってしまうことも少なくない。

過程にこそ学びがあるということをもう一度頭に入れてほしい。そこで「探究／探究的な学び」が取り上げられる。「探究」という言葉は新しく出てきたように感じるが、ずっと昔から考えられてきた概念である。「経験主義」「構成主義」「社会的構成主義」などいろいろな教育哲学があるが、共通しているのは「過程」を重視することである。

このような「深い学びが、勤務校でどの程度実現できているか」を振り返ってほしい。このような学びのプロセスを経験していない先生方が多いので、全体で実現できている学校はそれほど多くないように感じる。

よく、講演依頼を受けるが、求められる探究のテーマは、「総合的な探究の時間」における内容が多い。職場体験や大学訪問、修学旅行に関わる活動を「総合的な探究の時間」に位置づけて済ませている学校が依然として多いように感じる。外部団体に依頼するにしても、一過性の活動とならないように、各校生徒の実態を踏まえて学びをリデザイン、カスタマイズし、持続性ある活動にしてほしいと願っている。

また総探を頑張っている学校でも、総探の時間は所詮週 1～2 時間。そのような学校で、教科の授業がどのようにすすめられているのかにも興味がある。実際は旧来型の授業スタイルを貫いているというのが大半のように感じる。総探と教科の授業とのギャップが大きい。高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説にも、「総合的な探究の時間」や「理数探究」、「理数探究基礎」は、課題を発見し解決していくために必要な資質・能力を育成することを目的とし、複数の教科・科目等の見方・考え方を組み合わせるなどして働かせ、探究のプロセスを通して資質・能力を育成するものである。なお、「探究」の名称が付されていない教科・科目等についても、それぞれの内容項目に応じて、探究的な活動が取り入れられるべきことは当然である。」とあるように、各教科等における探究的な学習活動も充実する必要がある。

総合と教科の関連について 3 つに立場を区別すると、第一は、総合の視点や方法を、教育課程全体に浸透させようとする立場である。この立場は、総合で重視される問題解決的な学びこそが本来学校教育で展開されなくてはならないものと考え、系統的な教科教育を批判する。第二は、総合を教科学習の充実・発展させたものととらえる立場である。この立場においては、教育課程上に総合を置くことは、教科学習の軽視・否定につながると考えて批判される。そして第三の立場は、総合と教科のそれぞれに固有の役割を認めつつ、両者の「相互環流」を構想しようとする。学習指導要領は、第三の立場である。

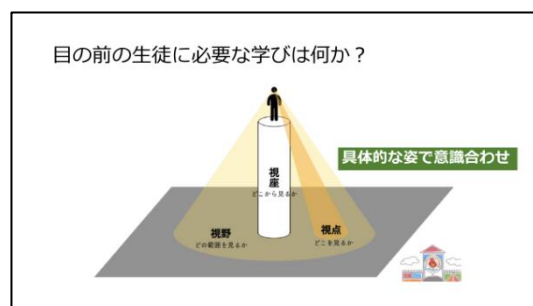
現状では、十数年前に比べれば、教科の深い学びを行う学校の割合が増えてきているが、限定的だ。ボリュームゾーンの生徒のほとんどは、未だ旧来型の授業スタイルが主流のようである。教育に携わる立場からすれば、「何を残せているか」に責任をもち、目先の受験だけではなく、将来を見据えた取り組みをしたい。

取り組みの現状とめ線を合わせたところで、校内のアップデートを考えて行きたい。

対話①「担当教科の授業を通して、育てたい生徒の姿とは？」⇒先生方の想いをグループでシェア

対話②「最近おこなった（参観した）授業の目標は何だったか」⇒グループでシェア

①と②を比べてほしい。「②授業の目標」が「①卒業時の姿」につながっているのか、ギャップがあるのかを各自で比較してほしい。ギャップがあるということは、自身の教科を教えるときには「視座」（どの立場で物事を見るか／考えるか）が低くなってしまいがちである（狭い範囲を深く見ている状況）。他教科の先生から「何のために教えているのか」と問われると、明確にその意義が答えられず、「教えるべきことなんだ」となりがちである。反対に、視座が高すぎると、教科との関連性が薄れてしまう。大切なことは、具体的な生徒に合わせた「め線」を自在に上げ下げすることだ。



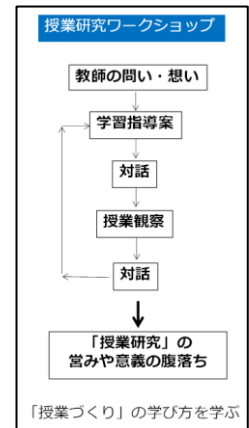
合同会社あしたの学校 吉田悠馬・岡田羽湖より引用

対話②'「②でどのような「目標」を設定すれば良かったでしょうか？」⇒グループでシェア

視座を高くして遠くを見るには、スクールミッションや建学の精神と照らし合わせたビジョンが必要である。次に、視点を下ろして、自教科がそれにどのようにコミットしているのかを考える。生徒らの現状と教科のビジョンにはギャップがあっても当然だが、そのギャップをどのように狭めていけばよいのだろうか。それには、3年後や6年後から逆算して、何年生ではどのくらいになってほしい、この単元が終わる頃にはこうなっていてほしいと考えていく。このように現状とビジョンの間にある段階をどのようにデザイン、提示し、各段階での目標を明確にしていくことが、学校全体に探究的な学びを実装化していくことにつながる。

そして、学期末や学年末ごとに状況を把握し、調整していく。その把握が評価（アセスメント）である。漠然と評価するのでは無意味で、現状とビジョンのギャップを示し、何をどのように取り組めば次のステージにつながるのかを明確にする。評価は「目標」をよりよく達成するために行うものであるから、評価と指導の一体化は大切な考え方である。評価込みで授業をデザインすることも必要だ。

伝達型の研修は、その場で勉強しただけで終わってしまうことが多い。それでは生徒の学びも変わっていかない。授業アップデートにつながるには、め線合わせの次の、意識合わせと呼吸合わせが必要である。それには、生徒らの現状と教科のビジョンの間を狭めていくにはどのような授業がよいかを一緒に考え、実際に授業中の生徒の学びの様子を観察し、その結果を持ち寄り省察するといった授業研究が有効である。東京学芸大学高校探究プロジェクトでは、そのような授業研究を実施するためのツールキットも開発し、web ページで公開している<https://g-tanq.jp/toolkit>。ぜひ利用していただきたい。



●研究討議●

「深い学び」の追求



6つの会場に分かれ、その中で更に4人の小グループにて、①探究活動についての取り組み及び課題、②個別最適な学びのデザイン、③学校での深い学びを育むための実践及び課題を主なキーワードに情報交換を行った。

●教育懇談会●



参加者同士の交流を深め、情報交換や今後のネットワークを作る場として、立食形式の懇談会を行った。

●学校視察●

◆校長挨拶 越智 規子 立命館宇治中学高等学校校長

京都市内から 10 数キロ、素朴な雰囲気を感じられる環境の宇治市といえば、平等院鳳凰堂、源氏物語の舞台、宇治茶の産地で有名である。本校は”Your Link to the World”、「学んだぶんだけ、世界が近くなる。」というタグラインのもと、ダイバーシティやインクルージョンが文化となっている。多様な価値観を理解し合い、生徒一人ひとりが自分の興味や関心に基づいて学び、自己成長を遂げる過程を大切にしている。本校での探究的な学びの発展は、このような学校文化が大きく影響している。生徒の 20%は帰国生、ネイティブスピーカーの教員は 39 名いる。留学生も全世界から訪れていて、生徒と一緒に学んでいる。授業視察を通して日常の学習の様子を見ていただきたいと思う。



現行の学習指導要領では、変化の激しい社会に対応して、探究の見方や考え方をはたらかせ、横断的総合的な学習を通して自己のあり方や生き方を考え、課題を発見し解決していく資質能力を育成することが目標として掲げられている。私学で学ぶ生徒が創造性を培い、主体的に学び続けられるように深い学びを追求・発展させることは私学教員の使命だと考えている。

R2020 という 2020 年を目標にした中長期目標を定める議論を 10 年前からはじめ、探究型の学力の重視を目標に掲げてきた。WWL の指定に引き継がれ IB 認定カリキュラムを学校全体に広げる取り組みに挑戦している。

限られた時間となってしまうが、全体会や視察を通して、参加の先生方が有意義な時間を過ごせるように願っている。

◆学校紹介 西原 丈人 立命館宇治中学高等学校高校教頭



今回は①立命館宇治中高の魅力、②卒業生がどのような進路を歩んでいるか、③中学校・高校それぞれの教育内容と特徴について説明していく。まず本校がどういった学校かを写真を基にご説明していく。校舎は A 棟、B 棟、C 棟 (IB)、体育館棟がある。スクールバスは直行便がキャンパス内に入ってくる。テニスコートは 6 面有り、グラウンドは人工芝と土を完備している。人工芝は特に 3 年前に張り替えたばかりなので、今、生徒達は一番良いコンディションでクラブ活動を行っている。体育館アリーナは冷房完備で夏場でも熱中症の心配がない。全教室にはプロジェクターと無線 LAN を完備しており、プロジェクターを使った授業が中心に行われている。パソコンを完備している 5 つのメディアルームでは、生徒達自身がパソコンを持ち寄って、それぞれのグループでプレゼンの練習や発表ができる。本校の図書館は蔵書数が 53,000 冊で非常に充実している。C 棟のコミュニケーションラウンジは、生徒達の憩いの場ともなりつつ、授業でも活用している。大ホールは 800 名収容可能。作法室では本校は中学 1 年生で全員が茶道を必修としており、授業で使うほか中高茶道部も活動している。

次に本校の 3 つの魅力「立命館附属の優位性」、「日本屈指のグローバル教育」、「探究型・体験型の学び」を紹介していく。1 つ目の「立命館附属の優位性」は中高大と接続していることから、進路指導やキャリア教育をしっかりと指導できる。また、大学附属のため、そのまま立命館大学や立命館アジア太平洋大学に進学していける優位性がある。2 つ目の「日本屈指のグローバル教育」では本校は国際教育・英語教育に力を入れているが、39 名のネイティブ教員が授業を行っていることも特徴の 1 つである。3 つ目の「探究型・体験型の学び」についても特色ある授業やプログラムを展開している。

卒業後の進路について、中学校で 2 つのコース IC コース、IP コースに分かれ、高校に上がると IG コース、IM コース、IB コースの 3 つに分かれて進学することとなる。そして、大学では、京都府にある衣笠キャンパス、大阪府にある大阪いばらきキャンパス、滋賀県にあるびわこ・くさつキャンパスの 3 拠点と大分県別府市にある APU (立命館アジア太平洋大学) があり、国際性ランキング全国第 1 位、教育充実度ランキング全国第 3 位という実績を持っている。このどちらかの大学には成績基準を満たしていれば進学できる。昨年度は 5 名が APU に、369 人が立命館大学に、14 名が海外大学に、国内他大学にも 29 名進学している。立命館大学内の学部については高校 3 年間の成績の高い順に行きたい学部を選択できる制度になっている。

中学校の教育について、1 学年が 6 クラス（約 180 名）でその内、帰国生が約 40 名いる。中高併せて本校の帰国生は 2 割程度である。英語はグレード別に分かれ、1 クラスずつではなく、少人数授業を展開している。コースとしては 2 コースあり、中でも IP コースは入学時、英検準 1 級を取得しており、高校では IB コースに進学することを前提としている。IC コースが 5 クラス、IP コースが 1 クラスという編成になっている。その後、高校では、IP コースに在籍していた生徒たちはそのまま IB コースに上がり、IC コースに在籍していた生徒は IG コースか IM コースを選択する。

本校の中学教育の特徴としては、まず、英語教育については英語”を”学ぶのではなく、英語”で”学ぶプログラムを展開している。楽しい体験プログラムとして「WOW プログラム」や「QUEST」、「TOK 道徳」といった特色あるプログラムを提供している。総合学習や学校行事、クラブ活動も盛んに行われている。英語について詳しく説明すると、IP コースでは数学・理科・社会の 3 教科は全てネイティブ教員が英語で授業を行っている。IC コースではネイティブの教員と日本人の教員が授業を展開している。A1（英検 2 級以上）、A2（英検準 2 級相当）、A3（英検 3 級相当）、レギュラーのコースに分かれる。中学 1 年時夏には「イングリッシュキャンプ」を実施しており、立命館附属校の中学生が集まって、1 泊 2 日で英語漬けの合宿を行う。中学 2 年時には立命館大学に來ている留学生を招いて、交流会を行い、生の英語を聞き、他国の文化を知る。GCP（グローバルチャレンジプログラム）という教員が海外で設定したプログラムに希望者が参加できるようになっている。昨年度ではシンガポールやラオスで行った。中 2・中 3 対象でセブ島での英語漬けの研修会も行っている。中 3 では修学旅行ではなく海外に研修旅行として全員がオーストラリアで 2 週間ホームステイを行う。

体験プログラムとして、「WOW プログラム」がある。生徒たちが驚き楽しめるような体験を教員がプログラムを作り、生徒達に提供する取り組みである。「TOK(Theory of Knowledge)道徳」という授業は、「知の理論」という IB コースで行っている授業を本校の道徳教育に導入し、答えのない問いを自分たちで考えていく、論理的思考力・批判的思考力を身につけていこうという授業を展開している。「QUEST」という探究授業では、マニアック自己紹介や論文の授業を展開している。中 1 の総合学習では、「陶芸」、「茶道」、「書写」、「日本舞踊(女子)」、「和太鼓(男子)」、「しめ縄づくり」、「茶摘み」を授業に取り入れ、ホンモノに触れる機会を設けている。中 2 では大工の棟梁をお呼びし、かんな掛けから「木工」を学び椅子づくりを行う。学校行事としては本校の文化祭「興風祭」のステージで、中 2 ではダンスを、中 3 では演劇を各クラス発表する。体育祭を 5 月のゴールデンウィーク明けに開催する。11 月には合唱コンクールを行う。クラブ活動はアメリカンフットボール、女子バスケットボール、軟式野球、硬式テニス、陸上、サッカー、バトントワリング、バトミントン、吹奏楽、茶道、書道、美術部等様々な活動を行っている。加えて、「スカラアスリート & アーティスト」という制度があり、本校の中学入試の中で、一芸に秀でた生徒を募集している。

高校では、3 コースに分かれる。IB（インターナショナル・バカロレア）コースでは IB ディプロマを取得して海外大学進学を目指すコースである。13 年連続で世界平均スコアを上回っている。ディプロマ取得率 96.9%は世界平均 86.3%と比較しても高い数値である。就職先としては JAXA や鹿児島大学医学部への進学、ハーバード大学への進学等がある。IM（イマージョン）コースは 1 年間の海外留学を経て、帰国後は英語イマージョン授業を展開する。IM コースは 2 クラスで展開しており、夏出発はカナダへ、冬出発はオーストラリアまたはニュージーランドへそれぞれ 1 年間留学する。IG（インテグレイテッドグローバル）コースは文理融合型のカリキュラムを展開していて、探究型授業とオーストラリア・イギリス・カナダに 2 週間ほどホームステイする研修旅行を実施している。選択科目のパターンとしては 21 万通りある。その中で、実際に生徒たちが選択しているのが 271 通りとなっている。授業については、ネイティブの教員が SDGs について生徒たちに英語で授業を展開する。第 2 外国語の授業にてフランス語か中国語を選択できる。実験やプロジェクトといったコア探究も実施している。卒業生を呼んでキャリア研修会も行っている。主な進路先としては、薬剤師や経営者、JICA スタッフ等もいる。最後に本校で掲げているタグラインをご紹介します。「Your Link to the World(学んだぶんだけ、世界が近くなる。）」

◆実践報告 酒井 淳平 立命館宇治中学高等学校キャリア教育部長



立命館宇治中高の DNA について。30 年程前、学校法人宇治学園が学校法人立命館と合併してできた学校が立命館宇治中学校・高等学校。私自身、京都出身で宇治高校の時から学校のことは知っていた。立命館と合併して立命館宇治高等学校に変わり、学校評判が向上したように感じていたが、当時立命館の人間ではなかった自分は、宇治高校は立命館と合併したから学校が良くなったのだと考えていた。1999 年、私は兄弟校である立命館中学高等学校に着任したが、数年後合併当時にリーダーシップを発揮されていた方が校長として来られ、いろいろな話を聞き、自分の認識の間違いを知った。宇治高校は財政的にも厳しい環境の中、先生たちが有志で集まり、自分たちの教育観の話をしていて。立命館と合併したことにより、財政計画が立ち、入学者数も見通せるようになったことから、自分たちがやりたい教育を形にできるようになったと言われていた。こうした方たちの思いと実践が本校を支えている。学校の価値を決めるものは豪華な施設でもなければ、お金やネームバリューでもない。結局は教員集団のエネルギーによって決まるのである。立命館宇治高校はよく「新しいことに挑戦している」と言われているが、これはあくまで過去の貯金であって、未来はこれから決まると思っている。言い換えれば、未来を決めるのは我々教員集団ではないかと考えている。

探究学習について、大事な点として基本的に生徒は育ってきた環境も、どこに時間を使いたいかも異なっている点がある。よって、何かをする時には一部の生徒を対象により尖らせる、裾野を広げることの 2 点が大切である。裾野を広げただけではあまり面白くないし、一部の生徒が頑張ったとしても、それは学校の教育力ではない。よって、本校の探究はこの 2 点を常に意識しながら取り組んできた。本校では立命館と合併した 30 年前から探究的な取り組みをずっと行ってきた。IB の認定を受けるまで国際的なコースの探究学習を確立し、2018 年度からの新カリキュラムでは中高併せて全校対象に探究プログラムを作った。

学校の構成としては、中学校では IC・IP コース共に土台力の養成を意識している。柱となるのが、「TOK」、「QUEST」、「WOW」。この中で「QUEST」がいわゆる探究に位置づけられ、生徒が自分自身を深めたり、自分自身の興味関心を論文のようにまとめたり、企業とコラボした学習に取り組んだりしている。自分を知る⇒社会と繋がる⇒社会を変える、の順番でプログラムを組んでおり、中学校の核として位置づけている。同時に思考のトレーニングとして「TOK 道徳」も核となっている。続いて高校の方では 3 つのコースでそれぞれ違う取り組みを行っている。まず、IB コースについては国際バカロレアの方で予め決められたプログラムがあり、既存のカリキュラムの核として探究が位置づけられている。IM コースは 1 年間留学する特徴があるが、SGH の指定を受けて以降、「留学」と「イメージ教育」だけではなく、「探究学習」を 3 本目の柱に位置づけてきた。「GLS」(グローバルリーダーシップスタディーズ)という科目で、日本文化についてしっかりと知った上で、国際貢献や地域貢献をしていくプロジェクト型の学習である。IG コースでは 2018 年度から自らの興味・関心から出発し、最終的に社会を 1 ミリでも変えていくキャリア教育を重視した探究学習をスタートした。3 年間で探究を 6 サイクルするカリキュラムになっている。この全てに繋がる思想は、土台となるスキルやマインドを育てる各教科バラバラしたものを増やすのではなく、探究を核として生徒達も教員も共に育つということである。このことを大事にしてカリキュラムを組んでいる。大事にしている考え方として生徒達を「生産者」つまり、価値を与えてもらうただの「お客様」ではなく、自ら価値を提供する「生産者」に育てていくことがある。これをコース関係なく探究学習では常に重視し生徒達にも伝え続けている。こういった活動を通して、教員も学び合って、力を付けて探究していく。このような形でようやく中高の探究の形はできつつあるかもしれないが、まだまだこれからなのかもしれない。2022 年度から今年度まで三菱みらい育成財団の助成を受け、ネットワークを意識しながら探究プログラムのさらなる充実を図っている。ネットワークがあると生徒と教員の心のエンジンが駆動する。生徒が変化する土台では我々教員の変化や成長があると改めて感じた。生徒のひとりが「自ら行動していかなければ、物語が始まらない。」と報告書に書いていた。卒業生が探究のデータベースを作ってくれた。我々が仮説として思っていたことは恐らく間違っていなかったと思う。心のエンジンとはネットワークの力によって駆動し、生徒は教員の予想を超えて成長する。ただし、ネットワークがあることによって学びも深まると思っている。学校同士の心のネットワークを強めることこそ、学校の教育力であり、学校の価値ではないかと感じている。探究があるからこそ、学びのストーリーが豊かになる。そして、探究は大学に繋がるということを実感している。我々としては良い探究プログラムができれば良いのだが、やはり私学であることから教員で決まる。我々教員が学び成長する教員集団になれるかどうか、重要だと思うときが多い。探究学習をやってスライドやノウハウはいくつも残るが、想いの部分の継承はすごく難しい。本当に私たちは未来を切り拓ける教員集団なのだろうか。この問いを我々は真摯に受け止めて、今日から頑張っていく必要があると思う。

◆授業視察・施設見学

中学校

No.	学年	組	コース	教科	科目	授業者	教室		授業内容
1	中1	1	IP	国語	国語	中村華	4階	J1-1	
2	中1	1	IP	国語	国語 JSL	佐藤志	3階	A312	英語を母語とする生徒対象
3	中1	2	IC	音楽	音楽	福原	4階	第2音楽室	
4	中1	3	IC	社会	社会	河原	4階	J1-3	
5	中1	4	IC	外国語	英語 R	小野田	4階	J1-4	
6	中1	4	IC	外国語	英語 R	作本	3階	A301	
7	中1	5	IC	社会	社会	上蘭	4階	J1-5	
8	中1	6	IC	数学	数学	木越	4階	J1-6	
9	中2	1	IP	総合	QUEST	谷 Pulohanan	3階	J2-1	
10	中2	1	IP	総合	木工	木村 松村工務店	1階	技術室	外部講師による木工（椅子の作成）
11	中2	2	IC	数学	数学	黒川	3階	J2-2	
12	中2	3	IC	美術	美術	齋藤	1階	第1美術室	
13	中2	4-6	IC	外国語	英語 A3	Takagi	3階	M4L	
14	中2	4-6	IC	外国語	英語 A3	春山	3階	J2-4	
15	中2	4-6	IC	外国語	英語 R1(TT)	太田・高橋	3階	J2-5	日英話者のチームティーチング
16	中2	4-6	IC	外国語	英語 R2	伊藤	3階	J2-6	
17	中3	1	IP	技・家	技術	小曾根	3階	M3	
18	中3	2	IC	理科	理科	小竹	2階	J3-2	
19	中3	3	IC	国語	国語	石田	2階	J3-3	
20	中3	4	IC	技・家	家庭	川口志	2階	J3-4	
21	中3	5	IC	理科	理科	米田	2階	J3-5	
22	中3	6	IC	社会	社会	岡本悠	2階	J3-6	

高等学校

No.	学年	組	コース	教科	科目	授業者	教室		授業内容
23	高1	2	IB	保健体育	体育	松浦		体育施設	
24	高1	3	IM	国語	言語文化	鷺足	1階	H1-3	
25	高1	4	IM	情報	情報 I	石丸	3階	M1	
26	高1	5	IG	数学	数学 A	谷嵩	4階	H1-5	
27	高1	5-6	IG	数学	数学 A (スポーツ習熟)	伊藤本	4階	B417	
28	高1	6	IG	数学	数学 A	瀬野	4階	H1-6	
29	高1	7	IG	数学	数学 I	法柏	4階	H1-7	
30	高1	8	IG	数学	数学 A	島野	4階	H1-8	
31	高1	9-10	IG	外国語	Productive English Skills I(上級1)	Devun	3階	B317	
32	高1	9-10	IG	外国語	Productive English Skills I(上級2)	岡本邦	3階	B318	
33	高1	9-10	IG	外国語	Productive English Skills I	Reyes	3階	B301	
34	高1	9-10	IG	外国語	Productive English Skills I	Marashigan	4階	H1-9	

35	高 1	9-10	IG	外国語	Productive English Skills I	Gagnon	4 階	H1-10	
36	高 1	11	IG	家庭	家庭基礎	川口綾	4 階	H1-11	
37	高 1	5	IG	国語	言語文化	坂本径	4 階	H1-12	
38	高 2	5	IG	地理歴史	地理総合	大井	3 階	H2-5	
39	高 2	6	IG	国語	日本語 I	伊藤知	3 階	H2-6	
40	高 2	7-8	IG	理科	化学基礎	澤野	3 階	H2-7	
41	高 2	7-8	IG	国語	文学総合	稲垣	3 階	図書室	
42	高 2	7-8	IG	外国語	Proficiency Development English	森下	3 階	B302	
43	高 2	9	IG	地理歴史	歴史総合	町田	3 階	H2-9	
44	高 2	10-11	IG	理科	物理基礎	福島	3 階	物理室	
45	高 2	10-11	IG	理科	生物基礎	上杉	3 階	H2-10	
46	高 2	10-11	IG	理科	生物基礎	前田玄	3 階	H2-11	
47	高 2	12	IG	数学	数学Ⅱ	岩泉	3 階	H2-12	
48	高 3	2-3	IM	国際	Mathematics	Zara	1 階	H3-2	英語イマージョン授業
49	高 3	2-3	IM	国際	Academic Communication	Mitchell	1 階	B109	英語イマージョン授業
50	高 3	2-3	IM	国際	Citizenship	Swinger	1 階	H3-3	英語イマージョン授業
51	高 3	4-5	IG	外国語	英語コミュニケーションⅢ (中上級)	青山	4 階	B401	
52	高 3	4-5	IG	外国語	英語コミュニケーションⅢ	南	2 階	H3-4	
53	高 3	4-5	IG	外国語	英語コミュニケーションⅢ	西原利	2 階	H3-5	
54	高 3	6-9	IG	保健体育	体育	西田		体育施設	
55	高 3	6-9	IG	保健体育	体育	泉谷		体育施設	
56	高 3	6-9	IG	保健体育	体育	角川		体育施設	
57	高 3	6-9	IG	保健体育	体育	山根		体育施設	
58	高 3	10-11	IG	数学	数学Ⅲ	小松	3 階	M5	
59	高 3	10-11	IG	国語	日本語Ⅱ	中條	2 階	H3-10	
60	高 3	10-11	IG	国語	日本語Ⅱ	鹿谷	2 階	H3-11	



授業視察の様子



施設見学の様子

◆全体会（視察校への質疑応答）

Q：通常の教科学習や「QUEST」、TOK 道德、学年ごとにテーマの違う総合学習、WOW プログラムなどさまざまな教育プログラムを進めるにあたり、教員間で各プログラムの担当者を明確に示して実践されているか？また、先生方はかなり専門性の高い知見を持っておられているのか、それとも一緒に生徒と学びながらスキルアップをされているのか？（もしくは外部の専門家の方との連携をしているのか？）

A：探究授業を受けてこなかった教員だからこそ、生徒と共に手探りで学びスキルアップを心がけている。例えば、「木工」の授業では地元の専門の方をお呼びし、授業内でご指導いただくなど、外部の方との連携にも力を入れている。WOW プログラムは放課後に実施する事もあるが、生徒面談期間を WOW ウィークと位置づけ、午後の時間を最大限に活用し、WOW プログラムに没頭する時間を設けた。6 個のプログラムのうち、半数は外部の専門家をお呼びした。

Q：IB コースと他コースの生徒が交流するようなカリキュラムはあるか。

A：教育課程や年間スケジュールは異なっている。IB コースはディプロマプログラムが 2 年間あるが、高校 1 年の 1 月に始まり、高校 3 年生の 11 月に最終試験を受ける。教育課程上は他コースと合同になることはないが、体育祭や文化祭などの学校行事に関しては、コースの壁を越えた交流を図るようにしている。

Q：高大連携した教育システムについて詳しく知りたい。

A：立命館大学の付属校として、大学の学びを多く取り入れられる利点がある。夏休みにはサマースクールとして学部を体験できる。コア探究の中でも、大学の先生の助言が受けられている。中高大の連携システムもある。高校には一貫教育部を設置し、中学から大学までの橋渡し役を担っている。

Q：内部進学の際には、どのような基準で異なる 3 コースの順位付けを行っているか。

A：生徒の約 8 割は立命館大学に進学している。大学から割り当てられた学部・学科は人数制限があるため、希望者多数の場合には順位を付け、上位から進学させている。コース毎にカリキュラムが異なるため、コースの枠を超えた「学内推薦試験（3 科目）」を実施するが、あくまでも順位付けのスコアの一部分であり、高校 3 年間の学業成績とあわせて総合的に判断する。

Q：目指している教育と大学入試対策にギャップはあるか？もしギャップがあれば、どのようにギャップを埋めているか？もしないとすれば、両者の捉え方ないしその関係性をどう捉えているか？

A：大学入試対策は行っていない。大学入学共通テスト対策や 2 次試験対策の授業は設けていない。立命館大学の進学先についてのキャリア教育を行っている。キャリア教育部が主体となり、立命館大学の各学部学科の学びを生徒に共有する時間として、キャリアナビを設定している。

Q：海外大学への進路（進学）指導（情報提供、試験についての対策）はどのように行っているのか

A：IB コースに関しては海外大学の進学を視野に入れているので、キャリアカウンセラーを通したフォローを行う。実際に海外大学に進学するのは半数程度。その他の生徒は国内の大学に進学している。IB コース以外からも海外大学に進学する生徒もいる。

Q：働き方改革の取り組みについて。

A：2020 年度から 1 年単位の変形労働制を採用している。勤務カレンダーは 14 種類用意し、教員を割り当てる。例えば、強化指定部活の指導に当たる教員は、休日に部活動があるため、平日に法定休日を定めた勤務表で対応している。夏休み期間の研修旅行に引率する教員は、夏休み期間の勤務時間を長く設定し、その他曜日（例えば土曜日など）の労働時間を短く調整するなど、業務にあわせた勤務形態は多岐にわたる。学校法人立命館として年間 1940 時間の労働時間を設定している。法令に則り年次有給休暇を付与しているが、独自の「働き方改革推進休暇」を年間 250 時間分設定し、30 分単位で申請・取得できる。働き方改革を働きがい改革にしていきたいと考えている。

Q：IB、IM コースでのイマージョン教育を担当されている教員体制について、また、日本人教員と外国人教員の比率について伺いたい。

A：イマージョン教育を受け持つのは、ほとんど英語ネイティブスピーカーの教員である。教員全体で 200 名程度いるが、ネイティブスピーカーは、常時 40 名程度いる。全体の 2 割程度である。教員免許の扱いに関しても、臨時免許や特別免許状を活用して対応している。

Q：教員を巻き込んだ探究、共通認識を持った探究を実践している中で、どのように外部と連携しているのか、他校とのつながり方について伺いたい。

A：研修会等での一期一会を大切にしている。仙台三高とのつながりに関しては、若手同士の先生方がつながって一緒に何かできないかと相談を受けたのがきっかけ。管理職同士、現場同士がお互いの視察を通して交流を重ね、信頼関係を構築している。

Q：学内の教員研修の頻度や内容について伺いたい。また、若手・中堅・ベテラン教員が外部研修に参加する頻度やサポートに関して伺いたい。

A：教員研修に関しての課題は山積みだが、危機管理研修を含めて教員全体の研修は年間 5、6 回行っている。もちろん外部からの講師を招くこともある。外部研修に関しても管理職からの声かけもありながら、参加する体制が整っている。有志が集まって研修を行うこともある。

●参加者アンケートまとめ● 回答数：58／参加者数：132 名（回答率 44％）
内オンラインフォーム回答数：56（利用率 97％）

○当研修会への参加動機

探究的な学びについての理解を深め、ワークショップや懇談会で他校での具体的な取り組み事例を知りたい、変わり続ける学校教育の現場について学び、自らをスキルアップさせるためなど情報収集についての回答が多かった。また、立命館宇治中学高等学校の視察を目的とした回答も数多く見られた。

○講演Ⅰ・ワークショップについての感想

対話型論証を通した授業デザインやその事例は、本校の探究活動を見直す良いきっかけとなった。早速校内で共有し取り入れていきたい、「深い学び」の機会を「総合的な探究の時間」に限らず、各教科授業の中でどのように取り入れていけるかを学び、イメージアップができた、三角ロジックは生徒同士が対話をする上で主張に説得力を付けるために大切なスキルだということが理解できたなど、所属校での活用を具体的に考えるとした回答が多かった。

○講演Ⅱ・ワークショップについての感想

視点／視野／視座のレクチャーが特に印象に残った。普段我々が無意識／無自覚にやっていることや悩んでいることなどに自然と目が向く内容だった、探究が総合探究にとどまらず、通常授業こそが大切であり、建学の精神を意識した授業デザインにしていけることを気付かされた内容だった、など、結果や成果よりも過程が大切で、教員自身が自己研鑽をしながら教育活動を展開していきたいといった内容が寄せられた。

○研究討議についての感想

各校の実践例や苦労した点などがリアルに共有できたので良かった、教科や職位ごとのグループ編成だったので、より具体的な討議ができ、議論が深まった、など充実した時間になったという回答が数多く寄せられた一方、交流機会を増やすという観点から、討議途中でメンバーシャッフルを行いたいという提案も出された。

○教育懇談会についての感想

講演や討議とは違った雰囲気での情報交換が活発にできたので良かった、多くの先生方と立場を問わずコミュニケーションが取れたのでネットワークが広がったなど、肯定的な意見が多かった。

○学校視察（立命館宇治中学高等学校）についての感想

◇学校紹介

・校長先生をはじめ、対応してくださった先生方のぬくもりを感じ、人のつながりを大切にしていることが今の立命館宇治を作り上げているのだと確信した。また完成形ではなく、次に向かって進み続けるという教員集団のモチベーションの高さに感服した。

◇実践発表

・探究をコアに据えたカリキュラムとその実践について、実践発表をしていただいた先生のお話がインパクトがあり、今後のビジョンも詳しく説明があったので勉強になった。

◇授業視察

・校舎が綺麗で設備が充実しており、圧倒された。IB コースをはじめ、特色ある教育を実践しているところを視察でき、大変勉強になった。

◇施設見学

・最先端の教育内容と、その教育施設を見学し、校内にあふれる活気、生徒が生き生きとして学んでいる姿に感心した。

○研修会全体についての意見・感想

- ・全国の私学の実情や先生方のリアルな声が共有できて大変有意義な時間だった。多くの出会いと学びがあったので、今後活かしていきたい。
- ・毎年参加しているが、この研修会は志を高く持つ先生方ばかりで良い刺激となり、襟を正すことができる。新たな学びだけではなく、学校全体が同じ方向を向けるようイニシアチブを取っていかなければならないと感じた。
- ・最前線で活動されている講師の方々が、その活動を言語化してくれたことで、モヤモヤしているものが明確な形となった。

○今後の研修会への希望

- ・学校視察プログラムは目玉の企画だと思うので、先進的な取り組みをしている学校を視察したい。
- ・2つの講演・ワークショップを共通してメタフィードバックする講演者がもう一人いると、参加者が目からうろこになり、さらに研修が進化していくだろう。
- ・海外の教育現場の実態を知るすべが多くないので、教育先進国の教育内容や評価制度などを知る機会を作ってほしい。日本と海外を比較するためにも、海外研修を企画してほしい。
- ・2025年～2026年は次期学習指導要領の策定が本格化していく段階のため、少子化が急速に進行し受験機能による学習への動機付けが難しくなる今後を見通し、学校DXと個別最適学びをリンクさせた研究を行ってほしい。

都道府県別参加者数

No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数	No.	都道府県	人数
1	北海道	4	17	石川	0	33	岡山	7
2	青森	0	18	福井	1	34	広島	10
3	岩手	0	19	山梨	0	35	山口	0
4	宮城	1	20	長野	0	36	徳島	0
5	秋田	0	21	岐阜	1	37	香川	2
6	山形	3	22	静岡	5	38	愛媛	1
7	福島	1	23	愛知	5	39	高知	1
8	新潟	1	24	三重	2	40	福岡	7
9	茨城	1	25	滋賀	1	41	佐賀	1
10	栃木	4	26	京都	10	42	長崎	2
11	群馬	0	27	大阪	13	43	熊本	2
12	埼玉	0	28	兵庫	1	44	大分	1
13	千葉	4	29	奈良	2	45	宮崎	0
14	神奈川	10	30	和歌山	0	46	鹿児島	4
15	東京	24	31	鳥取	0	47	沖縄	0
16	富山	0	32	島根	0			
合 計								132
参加都道府県数								31

教科別参加者数

教 科	人 数
数 学	27
理 科	26
国 語	19
英語・外国語	17
地歴公民（社会）	24
情 報	2
技 術 家 庭	3
美 術	1
保 健 体 育	1
探 究	2
聖 書	1
その他(管理職等)	9
計	132

次年度（令和7年度）私立学校専門研修会・教育課程部会は
 静岡県浜松市・[アクトシティ浜松](#)／[浜松学芸中学高等学校](#)において
 令和7年7月3日（木）～4日（金）に開催致します。